

書評

今堀誠二博士著

『中国封建社会の機構』

― 帰綏（呼和浩特）における社会集
団の実態調査 ―

一

過日山崎学長から一本を頂いた。それは広島文理科大学教授今堀誠二博士の近業「中国封建社会の機構」と題するA5版の本文六九五頁、資料篇一四二頁からなる大部の書冊であった。一九四四年五月から十二月までにおよぶ期間のうち帰遠省の帰綏で試みられた社会実態調査の成果である。

著者には「北平市民の自治構成」や「中国の社会構造」の著書があるが、本書によって始めて帰綏で試みられた中国社会の実態調査の全貌が明らかにされている。

著者が内蒙の辺境地帯で凍傷にまでかかりながら、寺觀や

ギルド・ホールの石碑、匾額、文書、水牌、祭器等の資料の検索に精進された労苦は、今堀氏におよばないとしても、同様な経験を重ねた私には十分に汲みとられる。それでも東南アジアで集収した一切の資料を喪失した私に比較すれば、今日その成果をまとめられ、立派な業績を公刊された著者の立場は羨慕に堪えないものがある。

著者は序文の劈頭に「中国の書物に書かれたり、人々の話のなかに出てくるのは、大昔の聖人の弟子たちの説いた理窟ばかりだ。人民大衆の生活は、そんなものとはなんのかかわりもなく、彼らはただ黙々として成長し、そしてしばらくでしまい、枯れてゆく。ちょうど石の下におかれた草のようなものだ。この沈黙した人民の魂をえがきだすということは、ほんとうにむづかしいことだ」との魯迅の阿Q正伝の序文のことはを引用され、中国の正史、通志等が等閑に附していた民間社会の実情について、努めて沈黙していた人民の魂をえがきだそうとする企図のもとに、本調査の推進されたことが明らかにされている。

二

本書は帰遠省の帰化城（旧城）と綏遠城（新城）ことに前者における都市商工業者社会の実態調査である。本調査のねらいは社会機構の全般的観察であり、社会集団と名付けられ

ものは総ざらえにとりあげてを眼目とされているが、なおギルド・マーチャントを尖端とする商工業者団体の調査が中心となっている。

最初に「研究の方法と範圍」について述べ、そこでは著者の中国における封建制についての見解が明らかにされる。過去に幾度か繰り返えされてきた中国の封建概念をめぐる論争をここに再び展開する余裕はもないが、著者の見解に簡単にふれておこう。

著者によれば中国の歴史はアジア的な奴隸制、封建制、資本主義をへて、今回の革命となり、アジア的奴隸制は秦漢時代に完成し、中期以後崩壊期に入り、五代までの時代にアジア的封建制の生成をみ、明末頃から部分的に近代社会の萌芽をみたが、封建反動に押しつぶされながら、これを育てあげえないで、今回の革命前夜にまでおよんだとされている。本書の題目の封建社会もこの革命前夜までの現代のアジア的封建社会であって、決して周朝、春秋戦国の古代を取扱われたのではないことはいうまでもない。アジア的封建制は地主と農奴の対立を基礎として成立するものであり、前代の遺制の家父長的奴隸制が持ちこまれているところにアジア的特質があり、その労働力の搾取と人格的支配の土壌の上に奔えたものである。この農業における封建関係が一切の産業関係を規定し、これを商工業についてみると、商業資本、高利

貸資本を媒介として、前期的資本の所有者が封建的商工業者を支配する形で店舗や仕事場が構成され、またそこに支配人、店員、職員、徒弟の間に家族制度が擬制されることによって、家父長的奴隸労働がもちこまれたのであるとされている。

都市商工業者社会に奴隸労働が普及するか否か、ひいてはこれを封建社会と明確にわきまをきつてしまふことが正しいかどうか、その涯しない論争を展開することはここでは差控えておこう。ただ、ここでは著者と同じくマルクス主義的立場に立つ毛沢東や、鄧初民は周漢以降阿片戦争前までの中国社会を封建社会とし、阿片戦争後は半植民地的、半封建的社会と規定しており、かつてのロシアにおけるブルジョアジーと相違し中国のブルジョアジーには妥協性の反面、革命性をもつことを認め、労働者農民、プチ・ブルとともに民族資本家としてのブルジョアジーをも人民連合戦線に参加せしめたのである。著者はこの毛沢東の見解に反駁し、封建的な社会制度を民族的なものと思誤る危険性を包蔵するとのラディカルな立場を明らかにしている。

だが、本書の眼目は右の仮説の問題よりも、かかる仮説を論証する研究素材となる資料を提供されたことにあるのであって、帰綏の社会集団の歴史を個別的にとりあげ、その沿革から構造、職能につき、精密な調査を展開し、ことに商工業

「中国封建社会の機構」

ギルドについては、五二五頁を割き、本書の主要部分を構成している。以下、中国社会研究のためきわめて貴重な本調査の一端について簡単にふれておこう。

三

第二章の「綏綏の発達」では満州および、蒙古八旗の駐屯地で清初に成立した新城の綏遠城と、漢民族の入植により発達していった旧城の綏化城の歴史が概観される。綏遠城は経済的には綏化城に従属し、取りあげるにたる社会集団の発達をみなかったのに対し、綏化城では十八世紀の雍正乾隆年間から商工業集団の発達をみ、本書でとりあげられる商工業ギルドは綏豊社を除けば、何れも綏化城に成立するものである。綏遠城は政治的、軍事的都市にすぎなかったのである。

第三章では綏化城の「ギルド・マーチャント」がとりあげられる。その名称は雍正元年（一七二三）に現われた大行について、十三行、十二行社、十五社、商務会とかわって戦前におよんでいる。大行は当初店舗を単位として構成されていたが、乾隆末年頃からはギルドを単位として構成されるコレクティブ・ギルド・マーチャントに発展し、同時その名称も十三行、十二行社等と称せられるにいたった。右の名称からも明らかなるごとく、大行は小行に対するものであり、綏

綏における六、七十のギルドのうち有力な十二乃至十七行の商工ギルドをもって構成されていた。この大行に属するギルドのうち上位を占めるものは商業、貿易ギルドであり、下位の手工業ギルドも何れも職人団体ではなく、商人化した業主団体である。そこには商人支配の傾向が明らかにされ、職人団体その他の小行との間に一線が画され、政治的、社会的、経済的に商業資本乃至高利貸資本が領導の地位にあったことが跡づけられている。私の調査した広州のギルド・マーチャントの西共堂七十二行にも大小行の区別があったが、そこでは大小行は相互に共同して七十二行を組織し、その額数には相違はあったが、何れも役員の選挙権をもち、綏綏のそれに比較すればより民主的な構成を保持していた。

何れにもせよ、綏綏の大行を構成したのは当初では山西省出身者であり、開港後は河北省人の進出もみたが、何れも華北人であり、そこでは地縁的対立関係が弱く、出身地別団体よりも同業団体によってギルド・マーチャントが組織され、重慶の八省首事や、沙市十三帮、神戸、シンガポール等の商會が出身地別団体により組織される構造とは対照的な立場を示している。右のごとき傾向からしてか、著者は地域性や同郷性はギルドの本質的属性ではなくその凝制にすぎないとの見解を導き出されている。私見ではアジア的、ことに中国のギルドに関する限り地縁関係は本質的重要性をもち、地縁関

係が全然問題とならなくなる場合には、それはアジア的ギルドではなく、より近代化された新様式の団体へ変質しつつあることが予想される。帰綏の場合は山西省人を主体とする華北の地元商人的結合からして地縁關係が表面化しない結果から導きだされた見解ではなからうか。

大行の役員は郷耆總領であり、その選出方法からして商人實頭支配の傾向が明らかにされる。郷耆は対外的、宗教的方面、總領は内部の庶務的任務をもつものとされている。大行の職能ともいふべき事業については、政治、裁判、自衛、公益、慈善、祭祀に分って帰綏商人社会の自治生活の実態が興味深く詳細にわたって觀察されている。その解釈については奴隸制の癰瘡を伴った封建的な社会体制の基礎の上に展開されるとの著者の立場にvarietyはない。

官憲との關係について、単に消極的抵抗を試みるのではなく積極的に官憲のもつ権力を自家藥籠中のものとし、官憲と民衆の中間に立って双方の剣をふるうものとされている。大行は封建經濟の支持のためすべてのエネルギーを集中したが漸次資本主義經濟に妥協し、買弁化して軍閥に隸属するにいたり、他面帝國主義の封建制の温存からして商業資本から産業資本への發展がいつまでもさまたげられる結果となったとして、帰綏商工ブルジョアジーの「民族性」の存在を否定される。今堀氏の調査に従事されたのが日本軍の占領下であつ

たから、中国官憲の暴威と民間商人が一吏を陥るべくと虎のごとき」現実場面に当面されなかつたのではなからうか。またあるいは、華北商人の反官性と排外性は華中、華南のそれに比較すれば稀薄化しているものとみるべきであらうか。さらに、産業資本への未発達も、帝國主義勢力の阻止的影響以外に、本国政治機構の安定性欠除のファクターも無視されえない。中国の近代の産業資本は本国政治の暴威のおよばない旧租界内、乃至は海外の華僑社会に開花をみただからである。

四

第四章「商業ギルド」では、商業を他人計算による仲買店と自己計算による仲買卸商と小売商の三つに分類されている。最初に大行で指導的役割を果たした穀物仲買店としての店行聚錦社がとりあげられる。農民から穀物を買入れるとともにその見返りとして日用品を売捌くことからして店行は通常雜貨仲買の貨行をも兼営していた。他人計算の仲立を原則としたが、事実上は青田買による農民への前貸、また投機取引をも試み、問屋制に近いものがあつた。外部に対してはギルドの集團的利己主義により營業を独占し、内部的には仲間間的な共同体の原則が装われたとし、各店の経費の均等分担、店員への利益分配の実情が明示される。ついで、煤炭行社、皮行興隆社、家畜仲買の福興社、馬の仲買の馬店行社、驛店行

『中国封建社会の機構』

社、駱駝仲買の福慶社についての記述がある。第二節では仲買卸商として大行の筆頭を占めた雜貨行醇厚社、さらに茶貨商の金竜社、皮庄の生皮社が検討される。小売商としては、茶莊の公義茶社、鉄行平義社、蠟行、雜貨行（古物商）、估衣行（古着屋）、德盛社（肉屋）、義合社（西瓜の種子販売）がとりあげられている。

右の商業ギルドのうち、大行に参加するものは店行、皮行、馬店行、雜貨行、皮庄に限られていた。地縁関係では山西帮が支配的であるが、京綏鉄道の開通後は河北省人の進出が顯著となり、醇厚社の場合のときはその成員が山西帮から京津帮に交替をみていた。

第五章では「蒙古貿易ギルド」の集錦社の隊商貿易の実情が明らかにされる。集錦社は大行では醇厚社について第二位を占める有力ギルドであった。ついで、新疆、甘肅、寧夏との西北貿易に従事する漢民族の貨商の組織する新疆社と、貨商と運商をかねる回教徒の組織する清真社、車馬賃貸業の車店社、運送業の馬王社のごとき、辺区の綿綏における特殊的商業に関連するギルドがとりあげられている。

第六章、金融業ギルドには十八世紀後半から活動を開始した錢鋪と銀号からなる錢行宝豐社と質屋の当行の二つが取り扱われる。咸豊以後は産業資本に対する高利貸資本の支配体制が確立したが、近代的な銀行が逐次金融の王座に上った。

当行は農民に対する長期の小額金融を行い、錢行と同様山西帮で、また大行にも参加していた。

以上、商業、貿易、運輸業、金融業の諸ギルドを通じて、前期的な問屋を中心とする商人資本と高利貸資本とが支配的であり、そのうち五ギルドが大行の上位ギルドとして参加し、總体的に商人支配の社会を形成していることが明らかにされている。

五

第七章は「手工業ギルドと職人ギルド」で、各章のうち最も多くの頁数が割かれ、十五種の、染色、仕立、銀細工、製紙、染物、飲食、精米、醸造、製粉、粗毛皮、高級毛皮、皮革、フェルト、鍛冶鑄物、木材関係の各業についての伝統と慣行に対する精細な実態調査が展開される。農家の副業から出発した手工業が、都市に仕事場を独立させ、なお商業的要素と直接生産に従う手工業的要素が未分化のままである段階から、商業資本の導入とともに分化して従業員も賬房（商業部門）と工房（生産部門）への分業をみてゆく過程が總体的に觀察される。著者は手工業ギルドが商業資本所有者の社会集団化し、外は大衆に被害を与え、内は職人を収奪しつつ封建社会の全体を商業資本の下に屈従さすためのあらゆる努力が重ねられたとしている。

商人支配に対する職人の反抗として、製粉職人ギルドの六合社が製粉業者ギルドの福虎社に対し、また皮革職人の意和社が靴行集義社に対する抗争のときが指摘されるが、ドイツ型のツント革命にみられるごとき徹底した傾向はみいだされない。職人ギルドは各行からしめだされているが、なお技術出身者から経営者となり、身股(利潤分配参加率)をもつ場合もあり、手工業ギルドのうち、仙翁聚仙社、碾行青竜社、粗皮行威鎮社、帽行衡義社、榮豐社、靴行集義社、毡毬社のごときは、各行にも参加している。著者とは別の角度から、都市の商工業者は外部の官僚、軍閥の封建専制勢力の絶対支配に吹きさらされながら、長期的生産投資、従って近代産業資本への転換の途は閉ざされ、また官治の無能を補うため、大行の商人支配の地位を高めつつ、職人をふくめての商工業者達は相互の斗争よりも、当面する共通の官僚デスポチズムの支配のもとに、むしろ妥協、結束の雰囲気うちに生息していたともみられるのではなからうか。

六

第八章の「牧業ギルド」では厩房は漢人、工房は回民からなる京羊荘のギルドについて簡単にふれ、第九章の「サービス業ギルド」では理髪師、賭博師、俳優、武術師(輸送保護業)のそれ等について、手工業ギルドとは別個に取り扱われ

ている。サービス業ギルドでは、商業資本側のギルドに対立する職人だけのギルドの成立をみないこと、都市という地域性の枠をのりこえていること、製造品の有無の三点からして手工業から分離せしめたとされている。第十章「読書人ギルド」としては、帛綬における副都統、帛綬道庁、帛化府庁、管獄巡検署の各官衙の胥吏の団体としての「三義社」と、財務胥吏の団体の「德義社」、教師の団体の「崇文社」にふれている。

第十一章「プロビンシアル・ギルド」では同郷団体は同族に準じた形で組織されるが原則であるとし、その事業として公所の経営、祭祀、終葬、慈善について簡述し、その政治的、経済的機能については何等ふれていないのは、帛綬では華北人の地元商人的結合のつよいことを反映せしめているものと理解される。第十二章「フリース・ギルド」では、北京のそれのごとく、消防、自衛、祭祀、公益にまでおよばず、公益祭祀以上に出なかつたとし、北京、滄県のそれに比較すればいちじるしく見劣りがし、それはギルド・マーチャントの活潑な動きと客商の多いことに帰している。第十三章では「村落および村落連合」第十四章では「蒙古人の社会集団」が附説されている。内蒙の帛綬の社会調査からして当然敷衍して問題とされるべきものである。村落団体としては帛化城周辺の西竜王廟村の土地所有団体の福興社、西園、三里營等

『中国封建社会の機構』

の五部落の組織する農圃社、帛化庁に属する四郷の農地所有者団体の四郷農民社について観察され、共通して共同体の見せかけによる大農場主の専制体制、乃至は地主上農層の擁護団体にすぎないとしている。蒙古人の社会集団としては、蒙古官吏の社会集団ともなっていた「蒙古社」を中心として観察されている。

蒙古社は土默特旗と表裏一体をなす組織構造をもち、封建的な官僚制度の補強策として生れたものであり、寄生的な封建地主の集团的利己主義実現のために組織された社会集団とする。すなわち、著者に従えば、都市の商工業者社会も、農村の地主団体も、蒙古社も、何れも同系列の封建社会として観察されている。

七

末尾には資料一四二頁を附載されている。同政者のためには貴重な参考資料である。

北辺の要衝帛綏の社会の總体的觀察を通じて、商工ギルドの構造、職能が華中、華南、日本、東南アジアにおけるそれ等ときわめて共通するものがあることが明らかにされる。ただ、即座に氣のつくのは帛綏の地縁団体にみるべきものなく、血縁団体にいたっては一個としてみられないことである。南下すればするほど、地縁団体が大きな役割を果し、華南から

東南アジアの華僑社会にいたれば、血縁関係の姓氏団体が大きくクローズ・アップされる反面、そこでは商業資本に停滞することなく、西欧資本主義への従属性を脱却して近代的産業資本の輩出をみている。北辺社会の実態をもって、直ちに中国社会全股を封建社会と公式主義的に割りきってしまい、革命目標に組み入れるところに、学問の領域をのりこえ、政治的実践の立場にたつことに大きな危険が感ぜられる。この点を問題としなければ、本書の実態調査として業績は素晴らしいものがある。文学出身の著者が、商工業慣行を余すなく究め、経済研究としても立派な成果をあげられたことは驚嘆に値する。私は東南アジアで集収した同様な調査資料の一切を喪失したが、なお著者の調査にも教示をうけ、中国ひいては海外華僑社会に対する自説を明らかにする機会をもち、改めて著者の批判をえたいと思っている。短時日にとりまとめた本書評は本書の内容を十分に伝えうるものでないことを怖れる。予め著者の寛容をお願いしておく。(丸善株式会社発売、A5版、全八四三頁、定価一二〇〇円) (内田直作)